

子どもの経験を生かして

—— 経験、活動、そして、創造的ということ ——

片 岡 靈 恵

外国の教育関係の人々に、よく聞かされた用語に、*Experience*、*Active*、*Creative*、*Activity*、*Activity*、それに、*Creative*、*Activity*がある。一時は、この三語さえ繰り返して使っていたら、新教育のすべてが論じられるかのように思われたほどである。私たちが毎日、心身を傾けている保育の仕事に、子どもの経験を生かしているだろうか、また、どのように生かしたらよいかという問題を考えるのに、私は今、この経験ということ、活動、および、創造的という二つの事柄との連関において捉えてみたい。

教育のカリキュラムが、児童の生活経験から出発するべきか、または、教師が与えたいと意図するところの教課内容を中心とするべきか、の問題はさておき、私たちの日々の保育に、子どもたち自身の経験から学ぶところは数えきれない。私たち指導者は、実に、教える者であるより先に、教えられる者である。

殊に、幼ない子どもたちの一日一日は、新鮮な「おどろき」でいっぱいである。あの小さな身体は、好奇心のかたまりである。どん

なに小さな草の芽の出現をも見逃さない。あの、キラキラした眼の輝やき、動くものがあれば、直ぐに近づき、触って見、うごかしてみ。小さいけれども絶えずよく働く彼らの手足と感覚。子どもたちは、こうして新しい経験を積み重ねながら生長してゆく。そればかりでなく、時代の進展に伴って、現代の子どもたちの住む世界は、私たち自身が、かつて経験したものとは、大分異なっているようである。私たちは、すでに、子どもたちにとっては、何でもないような普通の経験の内容が、理解出来ずとまどう場合にしばしばぶつかるのである。

しかし、私たち保育者の多くは、幸い、子どもの生活を愛情をもって見守り、彼らの経験を、畏敬の気持ちをもって受けいれる広い心がまえをもっている。常に、子どもの傍らに立ち、彼らの生長を助ける土壌をつちかうのが私たちの仕事であると思う。たとえ、子どもたちのすべてを理解し把握することは出来なくても、そうしようと努力し、いつも、自分を白紙にして、まず、子ども一人ひとりを、受

けとめてやろうとしていけば、彼らは、いつも、ありのままの姿で私たちの胸に飛びこんで来てくれるのである。

ところが、私たちは、ときどき、おどろくということをお忘れて、なま温かい、いわゆる幼稚園らしい空気の中に安住してしまふ。火花を散らすような、真剣な、子どもたち相互のぶつかりあいに気付かず、そこに溢れている生命力のほとばしりを汲みとらず、おとなの（多くは、若い女教師の）センチメンタリズムに、自己満足してはいないだろうか。倉橋惣三氏がよくおっしゃったように、幼稚園に、子どもの匂いがしない、幼稚園くさい匂いが立ちこめていないだろうか。子どもの世界は、たしかに未分化の、夢の世界である。しかし、子どもたちの夢の国、（殊に、現代の子どもたちのすむ世界）は、私たちおとなの想像することも出来ないほど、広く、複雑な色彩と構図をもっていると思う。

では、私たち保育者は、どうしたらよいだろうか。あまりにも生きいきとした子どもたちの生活を見つめれば見つめるほど、自分自身がいかかにみじめな、不自由なおとなであるかに気づくのであるが、さて、そこから、どのように立ち上がったらいだろうか。私は、ここで、子どもの経験から学びとった学習活動——アクティビティー——に救いを求めたい。子ども自身の多くは意識していない、いわば本能的な諸経験は、教育的に計画され指導された学習活動によって、豊かになり、深くなっていく。幼ない子どもの経験は、放っておけばはかなく消えてしまうように淡いものである。そし

て、それらの多くは、小さな日常の出来事である。けれども、このような小さな表現をとらえて、その子どもの全身全生活を感じし、それを更に、積極的な活動にまで誘導するのが、新しいカリキュラムのあり方であると思う。その形式は、言語や音楽リズムによる表現になることもあるだろうし、造形活動や、集団行動において發揮されることもあるであろう。そして、その具体的な形は、私たちが、多少とも、伝統的に引きついでいる、いわゆる、保育カリキュラムとは大差のないものであるかもしれない。しかし、私たちの計画する学習活動が、子どもの経験を生かしたものであったら、それは、もう少し創造的な、しかも具体的なものになってくるのではないだろうか。非創造的な、抽象的な私たちが生まれるのではなく、何物にもとらわれない自由な子どもたち自身が私たちに与えてくれるものこそ、教育のカリキュラムを推進する力であると私は考える。

幼児の教育は創造的でありたいとの願いもここから出発する。子どもたち自身、吸収すること以上に、内から創り出す力をもっている。私たちおとなには、すでに、内から創り出しているこの創造力は、子どもの具体的な活動経験を通して引き出し学びとるよりほかはないが、せめて、この努力をすることにによって、保育のいとなみが、創造的なものになるのではないだろうか。子どもの経験を生かしたクリエイティブ・アクティビティー（創造的活動）こそ、子どもの生活を充実し、その生長を促進する大切な要素の一つであると思う。

（平安女学院短期大学）